

## 天然理心流・真壁道場

—江戸時代後期—



「真壁まかべさんの剣術道場けんじゅつどうじょうの評判をお聞きして、ぜひ息子にも習わせたいと思い連れてきま  
した」

ここは、万田村まんだの真壁平左衛門孝へいざえもんたかうじ氏の屋敷。離れにある道場から、木刀を振り下ろす  
音やそのかけ声が聞こえてきます。

訪ねて来たのは広川村くぼたさんざえもんの窪田三左衛門で、その横できりっとして正座しているのは平へい

之丞のじょうです。

「なかなかいい面構つらがまえじゃないか。私が教えている天然理心流てんねんりしんりゆうは、実戦的な剣術だ。大いにはげみなさい」

そう言って平左衛門は、平之丞の肩をたたきました。

入門した平之丞は一生懸命稽古けいこしました。剣術は楽しく、かなり上達した平之丞でしたが、いつも思っている疑問ぎもんがありました。あるとき平左衛門に思い切って聞いてみました。

「私たち農民が剣術を学ぶのは何のためでしょうか。剣術なんかは侍さむらいがやっていたらいいという人もいます」

「その侍があてにならないのさ。ついこのあいだも、甲州こうしゅう（現山梨県）で大きな騒動そどうがあったんだ（天保七年）。はじめは飢饉ききんで食えなくなった農民たちが金持ちの商家しょうかを襲う打ちこわしだったんだが、騒さわぎが大きくなり、乱暴者らんぼうものたちが武器を持ち、家々に放火ほうかをするよう

「になったんだ」

「それでどうなったんです」



「お役人の侍たちの中には、逃げてしまった者もいたらしい。最後は村々から人を出させて、騒動を起こしている奴らを捕まえていったということだ」

「われわれも田や畑のことだけをやっていればいいという時代じゃない。私たちの命や財産は自分たちで守らなければならぬということですね」

安政六年（一八五九）、平左衛門が八十五歳で亡くなりました。その跡を継いだのは、養子となっていた平之丞です。ときは幕末、落ち着かない世情の中にあり、真壁道場には三〇〇人以上の門弟もんていがおりました。

それから五年後の元治元年（一八六四）の夏、稽古あいまの合間のことです。

「おい聞いたか。近藤先生たちの新選組しんせんぐみが、京都の池田屋という旅館に斬り込んで、長州や土佐の浪士ろうしたちのたくらみを防いだんだというぞ」

「たくらみっていうのは何だい」

「なんでも、京都の街に火を付けて、そのどきくさにまぎれて、天子てんしさま（天皇）を連れ出そうとしたらしい」

「そいつらをやったのか。さすがは近藤先生だ」

「ところで、その近藤先生というのは誰なんだい」

一人が割って入りました。

「なに、この真壁道場に通かよっていて、近藤先生を知らないのか。近藤先生かよつてのは、俺たちが習っている天然理心流の四代目で、名は勇いさみだ。先年、將軍さまをお守りするため江戸の道場仲間と一緒に京都にのぼったんだ。そのあと、新選組という隊をつくって京都の街を守る役目についているのや」

道場生たちは、同じ流派の人たちの活躍を誇らしく感じました。

明治維新となり、もはや剣術を必要としない時代になりましたが、明治十七年（一八八四）六月、平之丞孝義たかよしの七十七歳の喜寿きじゆを祝って、真壁道場のことを後世に伝えようと弟子たちによって記念碑が建こんりゆう立りゆうされました。この碑は今、湘南平しやうなんだいらにあります。